

勤務医部会だより

日本沈没



幹事 細井延行
(名鉄病院 院長)

昨年来、国内ではスーパータイフーンと呼ばれる大型台風の襲来、南極大陸では18.3°という観測史上初めての異常気温、更にオーストラリアでの大規模森林火災など気候変動が原因と推測される災害が頻発しています。世界気象機関(WMO)によると、南極半島の北端は地球上で最も温暖化が進んでいる地域の一つで、過去50年で約3度上昇し、南極半島西側の氷河は過去50年で87%が失われているそうです。また国内に目を向けると、昨年9月の大型台風15号や10月に襲来した台風19号、更に台風21号は関東・甲信地方、東北地方に記録的な暴風雨や洪水をもたらし、特に台風19号では死者86人、負傷者476人、行方不明者3人、被害総額3,961億円という甚大な被害をもたらしたのは記憶に新しいところです。

これらの原因と考えられる地球温暖化は、人間活動による温室効果ガスの増加である事が極めて高く、大気中に含まれる二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素、フロン類などの温室効果ガスが海や陸などの地球の表面から地球の外に向かう熱を大気に蓄積し再び地球の表面に戻す事によって生じます。

特に18世紀半ばの産業革命の開始以降、化石燃料の使用や森林の減少によって地球温暖化が加速していると言われています。

地球温暖化の影響は、暮らしへの問題、生態系への問題の他、水への影響など多岐にわたり地球に深刻な影響を与えます。

特に「水の問題」では、海水が膨張し、過去100年で世界の平均海水面は19cm上昇しました。国によっては国土全体が海に沈んでしまうなどの危険に晒されていると言われています。日本で言うと、海面が1m上昇すると、大阪では北西部から堺市にかけて海岸線はほぼ水没、東京でも、江東区、墨田区、江戸川区、葛飾区のほぼ全域が影響を受ける様

です。

また地球温暖化に伴って、今世紀末には平均気温が3度から4度上がるというシナリオで温暖化が進んだ場合、猛烈な台風の発生・通過が増え、昭和34年の伊勢湾台風級の台風に見舞われるリスクがあると、名古屋大学・気象学の坪木教授も警告しています。

地球温暖化のリスクを軽減するには、当然化石燃料の消費を減らす(脱炭素)努力が必要ですが、米国のトランプ大統領や日本政府も及び腰です。

日本では特に2011年の東日本大震災の後、電力が逼迫し、その解決として化石燃料、とりわけ安価な石炭火力発電への依存度が高くなり、排出ガスに目をつぶっても電力を確保したいという思いが政府や産業界にも強まってきました。これらの決定に対して海外からも強い批判が寄せられている事は周知の通りです。昨年の12月にスペインで開催されたCOP25に参加した環境大臣の小泉進次郎大臣も以前と違い随分歯切れが悪い発言をしていたように思います。

一昔前に、小松左京の原作を映画化した「日本沈没」という作品がありました。

これは東京大地震により日本列島が沈んでしまうという内容で、この映画の背景には、日本列島沈没により難民となって世界中に散っていった日本人を描く、第2部の「日本漂流」という構想もあった様です。

最近の日本では、以前の様に四季を感じる時間が短くなった様な気がいたします。

何だか、入学式に桜が満開という風景もなくなったような気もいたします。

このところの大型台風や亜熱帯地方のような豪雨など異常気候をみていると、東海大地震より前に日本沈没にならないか心配です。

日本沈没は大袈裟としても、病院でもこれまでの地震対策に加え、台風などによる水害対策も講じなければと心配する今日この頃です。